

十二月感泣集

快感

快感ハ一過性ノモノデアル
クリカヘス事ハ出来ナイ
互ニアタタカイモノヲ感ジル
ドチラモハカナイオモヒヲスル

一瞬

あなたはカマキリの首をつまんで僕の方にさし出した
いたづらつぽい目をしてくちびるをとがらせて
僕にカマキリを見せた
茶色に緑の線のある細長いカマキリ
下腹をもだえて動かしてゐた
すべての足をさかんに動かしてゐた
「そんなものすててしまひなさい」
僕に言はれて あなたはすぐに草の上にそれを投げた
二人は無言で足早に歩きつづけた
大きい白い月が正面に出て
強烈なつめたい光が僕たちに向つてゐた
さつき見た事で僕は非常に怒つてゐた
カマキリの小さい三角の顔があなたに向つて笑ひかけ
その一方で彼の半面は僕を冷笑してゐた
身もだえながらも勝つたと言つてゐた
一瞬といへど三角関係の成立を僕は許せなかった

水無橋

穂田と代々木練兵場とのあひだにかかつてゐる
川でなくて鉄道の線路の上にかかつてゐる
山手線が走つてゐる
昭和初年の頃
少年だった僕は水無飴をしやぶりながらそこにゐた
麻布三聯隊の兵士の隊列がたくましく過ぎて行く

埃くさいカーキ色の集団には
緊張とどこか泣きさうな雰囲気があつた
大人たちも汗をかいたり怒鳴られたり打たれたりするのだ
彼等が過ぎ去つたあとの空虚さにやりきれない気持になつた
まだたくさん残つてゐる水無飴の黄色い箱を僕は橋から投げ飛ばした
渋谷からこちらに向つてゐた電車が急停車して
運転手が前面のガラス窓をおろして
片手をあげて上の僕の方を睨みつけた
その赤い顔もやるせない大人の顔だつた

階段

「ジャズ」を「奇楽」と訳したのはどなただらうか
僕は「奇楽館」にほとんど毎日行く
狭い階段を一段二段と数へながら登る
十三段と数へて考へる
「この階段の数は死への数ではないか
このことをいつか詩に書いてみよう」
うす暗い室に坐つてコーヒーを飲んでゐるうちに
気持が落ちついてそのことを忘れてしまふ
音の方は 僕の頭をつんざいたり おどろかせたり なだめたりしてくれる
二時間もすごすあひだに何枚かのレコードでは
何十人ものジャズメンが活躍してゐるわけである
僕は満たされた思ひで階段を下りる
狭い急な下りに気をつけながら下りる
時にはいつも持つてゐるステツキを忘れて
「奇楽館」の美しい女の人が追ひかけて来て
僕をよびとめてそれを手渡してくれる
重い闇の中を歩いてゐていつしか十三階段を詩に書くことを忘れてしまふ

追悼

1 丸山三四子

蟬川のお宅の庭には 芝生が敷きつめてあつた
中央に小さいアルミの箱のやうなものが置いてある
「あれは何でせう」
丸山薫はいたづらぼく笑つた

「見てみてごらんなさい いま向ふで家内が操作してありますから」
面白い噴水なのださうだ
水道の故障で水は出なかつた
あれから何年たつたことか
丸山薫去り
今日の午前十一時あなたの死去を知つた
あかるい午前の中突然蟬川の庭の幻を見た
アルミの箱が芝生の上を飛びはねて水を噴射してゐる
水は白くひろがり
くるくると不規則に舞つてゐる
「あつ 鶴なのですね」
水道の故障がなかつたら
あの日僕はこの感触を持つことが出来たのだ
蟬川の庭は芝生も荒れてしまつてゐることだらう

2 吉行エイスケ

中学生の頃
学校をさぼつて吉行さんを訪ねた
村山知義設計のパーマネントのビルの建つた頃である
二階の広い和室に招じ入れられた
僕は学校に行くのがいやなので
吉行さんに滅落への路を教へてもらひたかつた
「あなたは何よりも学校へ行くことです
勉強をして上の学校へすすむことです」
期待に反したのに吉行さんにさう言はれると僕はその気になつたらしい
当時何歳であられたのか
僕が弘前の学校から東京の学校に移つた頃
つまりそれから数年の後に三十代で吉行さんは亡くなられた
伊達得夫にかうした事を話した
「このあひだ吉行淳之介に逢つたら 彼も同じやうなことを父親に言はれたと話してゐました」
伊達得夫は僕にさう伝へた